

令和元年度 小学校教育実習報告

小学校教育実習担当 初等教育科 吉村 壮明・古川 元視・大田 亜紀

令和元年度の小学校教育実習は、別府市内の小学校において実施した。また、本年度より、小学校実習においては、次年度の教員採用試験受験前に、学生が子ども達と触れ合う時間を持ち、小学校現場を知る体験ができるよう観察実習を行った（1年生観察実習：5日間、2年生本実習：3週間）。

別府市内の小学校の内諾業務については、今年度新たに導入した「1年生の観察実習」も含め、昨年度より多い学生を受け入れて頂くこともあり、例年の流れを踏襲しつつ、別府市教育委員会への承認及び各小学校の承認を得ている。

本実習指導に関しては、現場での実習を念頭に置き、実習担当者から、現場での具体的な指導場面を中心とした指導を行った。

*

1. 学生数 初等教育科1年 36名
 初等教育科2年 19名

2. 実習先

- (1) 観察実習 別府市内小学校 14校

(境川小、南立石小、亀川小、朝日小、石垣小、東山小、上人小、鶴見小、
春木川小、緑丘小、大平山小、南小、別府中央小、山の手小)

- (2) 教育実習 別府市内小学校 14校

(境川小、南立石小、亀川小、朝日小、石垣小、上人小、鶴見小、春木川小、
緑丘小、大平山小、南小、別府中央小、山の手小、明星小)

3. 実習期間

- (1) 観察実習 令和元年 9月4日～10日（5日間）

- (2) 教育実習 令和元年 10月7日～28日（3週間）

4. 教育実習の意義・目的

これまで大学で学んできたことを、小学校の教育現場で経験豊かな先生方の指導のもとに、児童と直に接する具体的な活動を通して理解するとともに、実践的な指導力の基礎を身に付けるものである。同時に、児童や先生方との触れ合いの中で、教育の営みを具体的に学び、そこで得た課題を大学で研究することにより、教育者としての識見や教育観を養うことを意義および目的としている。

5. 教育実習校の様子

小学校実習担当者が各実習校を訪問し（教育実習のみ、観察実習はなし）、学校長に実習生の様子を聞き、さらに実習生本人からも取り組みや実習の現状について聞き取りをした。また、訪問時には時間の許す限りにおいて、実習生の研究授業、査定授業を参観するようにしている。

6. 教育実習を担当して

小学校で子ども達と関わったり、授業をしたりしている時の姿は、実習前、大学で講義・演習をしている時の姿と大きく異なっていた。生徒指導や授業づくりに悩みながらも、子ども達へ愛情をもって接する姿が大変印象的であった。教師という仕事の重みや尊さを一人一人が味わうことのできる実習になったことを大変嬉しく思っている。

自己決定の場・自己存在感

初等教育科1年 阿部 恵夢

私は観察実習で一番多く見た光景は、先生方が児童をたくさん褒めていたことである。

五日間私が苦勞したことは、短い間で子供たちのいいところを探してたくさん褒めるということだ。先生方の褒め方は、全て頑張ろうとやる気になるような言葉がけだった。いくら子供たちを見ていたとしてもただ見てるだけではだめで、この子はどういう風に言葉をかけるとできるということを早い段階で把握する必要があると考えた。

4日目の運動会の結団式で全校の前で実習先の学校の良いところを一言ずつ言った。しかしうまく子供たちに伝わったかわからず悔しい思いをして終わったことを後悔している。

そのあとに話した先生方の褒める声掛けは説得力があり、前で話す自信をなくした。そういう面では先生という職業の素晴らしさと大変さを学んだ。

授業を見て感じたことは一人ひとりの存在を大切に工夫をしていることである。

運よく3年生の算数の研究授業を見ることができた。そこでは一人で考える時間、友達の意見を聞く時間、答えを聞く前にどういう解き方をしたのか、いいと思った考えに自分の名前のマグネットを黒板に貼りに行く作業があった。最後のマグネットの理由を先生に聞くとただ見ているだけではなく自分はこの人と同じだ、もしくは違うと思うことで多様性を知り、自分の名前を自分で貼りに行くことでクラスにいるということを感じさせることができるためだと教えてもらった。自己決定もすることができ、自分はこのクラスにいるという自己存在感が非常に感じられると思った。子供たちも活き活きと思い思いの考えを出し合っている姿はキラキラ

して見えた。担当した学年の担任の先生からは個性の大切さも教えていただいた。一見自分にとって嫌な人、イライラすると感じる人であっても、関わってみると自分とは違ういい面やすごいと思うことがあるということだ。

簡単にできるように人間の脳では難しいと本で読んだことがある。難しいことでも乗り越え認めてあげられるほどの心の広い対応が必要だ。大人な対応と寄り添う気持ちをもち続ける大切さを知った。

放課後の環境整備も次の日の児童の集中につながるし、ほこりがダメな子にも優しい工夫でみんなに優しくかつ個人の対策にもつながる意図的な関りをしなければならないと強く感じた。

ユニバーサルデザイン、インクルーシブ教育、みんなに優しい教育ができるようになりたい。

褒めることは口先だけでは説得力がない。みんな褒める部分が違う。多様性があるように褒め方も多種多様ある。その中で教師という立場の人は、できる。大学の先生方も褒め上手で本当に尊敬するし、そういう風になりたい。私自身教員になろうと思ったきっかけは、小学校の5、6年生の時に担任をしてくれた先生の憧れで教員を目指すようになった。先生も同じように私を肯定してくれた。先生がいなかったら今の自分はいないし、夢がもてなかったと思っている。私自身忘れかけていた教員になったときに大切にされたことを観察実習を通して思い出した。子供たちの可能性を広げることが教員の役目の一つだと考えている。夢をたくさんもってほしい。可能性を広げるためには自己を知ってもらって自分の生きていく中でのプラス面や強みを生かして生きていってほしい。そんな子供を今の私ができるわけがないことだと思っている。正直自分自身もあんなに小学校の時には支えられてきたとしても今、すごく自信のなくなることのほうが多い。しかしその不

安に打ち勝ち絶対に先生になって挫折しながらでもどんなに苦しくてもこの夢が一人でも多くの子供に伝えられるようになりたいと思った。

綺麗事だと思われるかもしれなし、抽象的だと思われることがあると思う。これから勉強していく中で、具体化していつかかなえられるようになりたい。そう強く思った観察実習の五日間だった。

児童を見捨てない教育の現場

初等教育科1年 福原 有将

5日間にわたる東山小学校での実習が終わりました。私は、この実習が始まるまで具体的に自分が先生になるイメージをもったことがありませんでした。そんな風に思っていたことが、今回の実習に行かせていただいたことで確実に変わりました。

実習先の学校は、幼稚園、小学校、中学校とありそれぞれの学年が少人数のクラスとなっており様々な児童や園児と関わることができました。地域に根付いた学校であると感じました。少人数のクラスであるため、児童との関わりも深く、一人一人に寄り添った教育を行なっていました。少人数だからこそ出来る授業もあり、ファシリテーションという周りの人とコミュニケーションをとる授業もあり、こういった授業を行うことで周りの人とうまく関われない児童も、自分のことを理解してもらおうと発言します。学校嫌いの児童も徐々に減ってくると思えました。

時間が経つごとに、距離をとって何うような態度の児童とも、慣れてくると会話も上手く出来るようになり、児童の見えなかった一面も徐々に見えるようになってきました。感情が上手くコントロールできない児童もおり、今の自

分であつたら、「ちゃんとしなさい」、「甘えません」と声をかけてしまうと思います。しかし、それでは学校生活の中で、取り組みたくない活動に直面した時に、自分自身で感情をうまく抑えられる子に育たないと思いました。そこで、いろんな先生方の児童に対する言動を観察することにしました。先生方は、どんな感情に対しても「そうだね」、「分かる、分かる」、「分かるんだけど、今は、それはできないんだよ」、「悔しかったな」など頭ごなしに大きな声を出すのではなく、児童に対して共感し、寄り添う対応を心掛けていました。この言葉掛けで感情のコントロールが上手く出来ない児童も、スッキリ納得していました。気持ちを一旦受け止めてもらえてもらえるだけで、人の心は落ち着くことを学びました。一方的に、自分の感情を全否定されると不快な感情が残ってしまい、自己肯定感の低下に陥りやすく、これが、パターン化してしまうことで感情を豊かに育てることは困難になってしまうと強く感じました。学級に素直で元気な気持ちが満ちていれば、様々な困難に直面した時もそれを乗り越えて前向きに進んでいけると思い、自分が教師になった際には、言動は大事にしていかなければならないことだと学ばせていただきました。

たくさんの先生方と関わる中で、教師になったら日々、戸惑い、道を見失うことも多くなると言われました。自分は耐えられるのかと不安になりました。しかし、「教師は、児童の未来をつくる」という言葉を掛けられ、その言葉に心動かされました。自分自身の心を育て、勉強していくことが、児童の役に立つと学ばせてもらったとともに、学生時代にもっと出来ること、やるべきことがあるのではないかと考えさせられました。

5日間という期間の中で自分自身の力の無さに痛感することもありましたが、その反面、得たことがとても多かったです。この実習で、やっ

と教師になる上でのスタート地点に立てたと思
いました。また、来年の本実習までに克服する
べき課題に気付かされた時間でもありました。

「迷いから確信へ」

初等教育科2年 生野 真理子

最初、私は本当に小学校教員になりたいのか
という気持ちを確認するために三週間の教育実
習を乗り切ろうと考えていました。しかし、こ
の濃厚で充実した三週間を過ごしている中で
「小学校教員になりたい」ではなく「小学校教
員になって児童の成長を手助けしていきたい」
という強い思いに変わりました。

三週間を振り返ると一番に思い出すのは、四
年二組の児童全員と教員との関係性がとても良
い楽しいクラスだったということです。実習初
日から良い関係性が築かれているんだというこ
とが伝わってきました。しかし、その時はまだ
この関係性を築くにあたっての背景を知らずに
表面的な部分しか見ることができていませんで
した。

ある日の自習の時間に教師がいなくなると時
間が経つにつれて話し声が大きくなってきてし
まいました。その時に、実習生として注意しな
ければいけないはずが嫌われたくない、どんな
ふうに注意したらいいのかと迷ってしまい声掛
けができませんでした。そのことを担任の教師
と話をする、教師がいるときはみんな集中し
て静かに自習ができるが、教師がいなくなつた
り、他の教師になるとうるさくなってしまふこ
とが今のクラスの課題だとおっしゃってしまし
た。この課題を解決するために、あえて教師が
いない自習の時間をつくってどれだけ自分たち
の力で静かな環境を作れるのかを試してしまし
た。教師は児童ができるということを他の教師

にも証明したいし信じているからこそできるん
だとおっしゃっていて、信頼関係を築くにあ
たって教師自身が児童を信じるのが大切だと
感じました。また、よく叱られる児童ほど教師
はその後のフォローを欠かさずにして気につ
けていました。私は、いつもいつも叱られていた
ら児童の気持ちも離れていくと思ったし、理由
もなく叱ることはしてはいけないと分かりまし
た。そこから私自身も児童の成長のためにちゃ
んと叱るときは叱らないといけないと感じたと
同時に、叱った分以上に褒めていこうと思いま
した。この褒める上で重要な信頼関係を築く場
面はたくさんあり、授業では、教師が児童一人
一人の言葉を受け止めて大切にしている姿が多
く見られました。児童も教師が自分の言葉を受
け止めてくれたと嬉しそうな表情で授業に取り
組んでいました。私もそんな授業ができるよう
に一人一人の児童の言葉を受け止めて大切にし
たいと思いました。また、普段から教師がよく
児童を観察していて必ず一人一人との時間を
作っていました。このことは、児童理解にも繋
がるし、小さな変化に気づくことができている
なと思いました。私も少しでもクラスの児童
のことを知りたいし自分のことを知ってほし
いという思いから、毎朝教室に入る際には必ず
全員に聞こえる声で挨拶をして一人一人と話す
ことを心掛けていました。すると、少しずつ児
童の方から話しかけてくれ心を開いてきてくれ
ました。その経験はとても嬉しかったです。時
間がかかるけれども、毎日の積み重ねがとても
大切なんだと実感しました。

この三週間で私は小学校教員としての自覚と
責任を感じたと同時にやりがいと楽しさを感じ
ました。来年からは自分で学級経営をしていく
ことを考えると不安と期待でいっぱいですが、
いつも児童のことを一番に考えて行動していき
ます。その姿を見て児童もちゃんと見てくれて
いるんだという信頼が生まれると思います。こ

の三週間はこれからの教員人生を歩むにあたってかけがえのない宝物になりました。悩んだり困った時はこの経験を思い出して初心に返りたいです。きっと自分を後押ししてくれると思います。

先生方や児童から学んだ大切なこと

初等教育科2年 川口 朱蘭

今回の教育実習で初めて小学校に行きました。幼稚園実習との大きな違いの一つが教科制の授業があることで、休み時間や給食の時間などの児童との関わり方なども学びましたが、一番印象に残ったのが、やはり授業のことです。初めて児童の前で授業をして、大学生の前でする模擬授業とは違い、感じたことや学んだことがいくつもありました。

私は、二年生のクラスで三週間お世話になりました。二年生はとても元気で、毎回の中休みや昼休みは必ず外で遊んだり、授業では自分の考えをしっかりと持っていて、わからないところや納得のいかないところがあると「どうしてそうなるの?」「なんでこれはだめなの?」など、積極的に授業に参加している姿が印象的でした。児童の発想は様々で、そういう考え方もあるんだと考えさせられることが沢山ありました。実際に私も授業をやってみて、児童の予想外の考え方に戸惑ってしまうこともありました。今回の実習で算数の授業を二回やらせていただき、査定授業では、問題文を読んで足し算になるのか引き算になるのかをテープ図を使って考えるということをしました。その査定授業に向けて、一回目の授業では同じように問題文を読んでテープ図を使って考えるという内容をしました。めあて、課題、まとめを事前に考えたうえで行ったけれど、うまくいかないところ

がいくつもありました。児童の発言に対してちゃんと答えられず聞き逃したりしてしまったこと、納得のいかない児童に分かりやすい説明ができなかったこと、テープ図を使って分かりやすく考えられることが目的だったけれど余計に混乱させてしまったことなどが反省点でした。これらの反省点をもとに、どのようにしたら児童にちゃんと分かってもらえる授業になるのかを考えました。その際に、担任の先生にアドバイスをいただいたり、いろんな先生の授業を見させていただいて、どのようにしているのかを学びました。先生からのアドバイスで、児童の発言には答えを導くヒントが隠れているし、予想外のことを言ってくると他の視点の考え方もわかって面白いから、聞き逃さずにどんどん生かしていくと授業が面白くなると言われました。それらを取り入れながら査定授業に臨み、最初の授業に比べて児童が「わかった!」と言ってくれ、納得した様子を見せてくれたのは喜びでした。

査定授業を終え、見に来てくださった先生方からいろんな感想やアドバイスをいただきました。自分の中では児童の意見に耳を傾けていたつもりだったけれど、〇〇君のこの発言を生かしていたらもっとよかった、テープ図の貼り方をもっと工夫するとよかったなど、自分では気づけないような細かいところまで見てくださっていたので、新たな課題を見つけることができました。校長先生からは、授業のことだけでなく指導案についてもアドバイスをいただき、とても貴重な経験になったと思いました。

授業をすることを経験し、指導案を考えること、授業をすることの大変さはもちろん、授業中にどのようなことに気を付けないといけないのかも学ぶことができました。授業中の児童の発言の大切さ、予想外の発想があるからこそ授業が面白くなるということ、その際にすぐに対応できるスキルを身に付けることが必要である

ことなどが分かりました。教師が一方的に授業を進めるのではなく、児童一人一人が参加できるような授業を展開していくことで児童の授業への積極的な取り組みを促すことが大切であることも学びました。今回学んだことを将来に生かしていけるようにしたいです。